

イノベーション・生産性向上WG 第10回教育・研究TF 議事概要

1. 日 時：平成19年6月18日(月)13:00~14:00

2. 場 所：永田町合同庁舎1階共用第3会議室

3. 議 題：学習指導要領の問題点について

4. 出席者

(1) 有識者

帝京大学文学部史学科 滝沢由美子教授

高崎経済大学地域政策学部 戸所隆教授

(2) 規制改革会議

福井主査、小田原委員、白石委員、浅見専門委員、戸田専門委員

5. 議事概要

福井主査 それでは、定刻となりましたので、第10回「教育・研究TF」を始めさせていただきます。

本日は、滝沢先生、戸所先生にお越しいただきました。大変お忙しいところ、ありがとうございました。

本日は「学習指導要領の問題点について」というテーマで、お話をお伺いできればと存じます。

それでは、滝沢先生、戸所先生の順で、各先生10分ずつ程度を目途に御説明をいただけますでしょうか。どうぞよろしく願いいたします。

滝沢先生 滝沢です。済みません。座わらせていただいて、そのままでお話させていただきます。

まずは10分ということですが、資料がたくさんですけれども、いろいろ配らせていただいております。

アンケートについては、まだ配ってないかしらね。厚手のアンケートです。

事務局 アンケートは、もうお配りしてあります。

福井主査 ございます。

滝沢先生 ずっと地理学を教えていて、基礎的な常識とも思えるようなことを何も知らない学生が非常に増えているというのが、20年ぐらい前から言われていまして、その実態はどうなんだろうということでアンケート調査したものがお配りしたものです。

詳しくはそこに書いてありまして、これは日本地理学会の地理教育専門委員会で、私が委員長をしていまして、そのメンバーでやったものです。2005年2月22日にしました。結果はそこに表やグラフで示してあります。お配りしたものは、記者発表をしたときに記者の方々にお配りしたものと同じものです。

それに対する世の中というか、マスコミの反応は、こちらが思った以上に物すごいものでした。御案内の方もいらっしゃると思いますが、一部だけお配りしました。これは『朝日新聞』と『読売新聞』なんですが、非常に大々的に何段も抜いた大きな扱いをしています。地方紙でもこのぐらいの大きな扱いで取り上げられたということです。

それはどういうことを表しているかといいますと、イラク戦争で報道されない日はないわけです。それなのに、こんなに知らない。そのぐらいは知っていていいのではないかというのが、やはりマスコミの人たちの反応だった。非常に驚いたということだったんだと思います。

このような惨たんたる結果というのは、どうしてなのかということ、3枚つづりの「学習指導要領の問題について」というレジュメに書いてあります。

事務局 右側に滝沢先生のお名前が入っている、A4の縦の「学習指導要領の問題点について」というものです。

滝沢先生 それをいろいろ考えてみますと、まずは社会科という授業時数が非常に減少してきていることが挙げられると思います。折れ線グラフが2つ並んだ資料があるかと思えます。小学校の授業時数の推移です。昭和36年からのものなんですが、国語が85.9%、算数82.9%という程度なんですが、社会科、理科もですが、半分です。社会科52%というように半減しているんです。授業時数がこれだけ減っているということがあります。

中学校においても3分の2になっています。

全体として、社会科そのものの授業時数というものの減少が挙げられると思います。国語や算数というのは、調査をしたときに学力低下が数値で出てきたりして、割合見えやすいんですが、社会科というのは見えにくい。認識されにくいんです。しかし、こういう点から見ても、最も深刻な学力低下の状況になっているのではないかということが言えると思います。

口幅った言い方ですけども、国民教育という観点で見ますと、まず何が大切なのか。読み書きそろばんはたしかだとは思いますが、ほかにはやはり物の見方と考え方が大事。それを教える。そうすると、生徒その人や国がどういう位置にあるのかをとらえる力、認識する力、それは長い歴史を通して、自分はこういうところにいるという見方ができる。

今度は、地域全体の中で自分はここにいる。日本の国は世界の中でこういうところにあるというような、空間的に見てどこにあるのかとか、そういう空間的なとらえ方ができる。そういう時間軸、空間軸でとらえる物の見方があるだろう。

ほかには、科学的に現象を理解する力。原理などを究明するような力。それが大事なだと思います。

そういうことが大事だということから踏まえますと、空間軸で見る見方を教えるのは、やはり小学校では社会科ですが、地理なんです。そういう状況を考えると、地理履修者の減少があります。社会科そのものが減っています。

もう一つ、2つのグラフがあったかと思えます。縦に並んでいるものはありませんか。

事務局 こちらでよろしいですか。

滝沢先生 そうです。これは高校生についてなんですが、履修している、していないというのは、なかなか数では見えないんですが、教科書の需要数というもので代用しているんです。それを見ますと、世界史に対して、地理はやはり半分という状況です。高校生の約半数は地理を学ばないで卒業しているのが現状です。

そして、生徒数も減ってきますので、先ほど申し上げたように、総単位数も減っていますから、

ますます地理を学ばないで卒業している子が増えてきていると言えます。

それはどうしてなんだろうということを見ますと、教育課程、やはり学習指導要領が大きく原因として挙げられるのではないかというわけです。

教育課程の変更、テーマを書きおけばよかったんですが「戦後社会科（公民科・地理歴史科）科目の変遷」という2つ並んだものがあるんですが、左と右は同じ趣旨の図なんですが、右の図でいきますと、戦後初めて学習指導要領がつくられて、戦後何回も改訂されています。今度が8回目になりますが、今まで7回改訂されています。

高校での話ですが、5回目というのは社会科全体だったんですが、1989年告示の6回目の改訂のときに、地理歴史科、公民科というふうに社会科が2つに分けられました。新しい種目として、地理歴史科ができました。そのときに世界史だけが必修、世界史を含めて2科目4単位以上履修することという決まりがかかっているわけです。ですから、世界史だけは必修です。あとは4単位以上2科目取るということで、世界史か日本史を履修する、選択することになってくるわけなんです。世界史だけが必修になったということが、やはり地理を履修する生徒が減っている大きな原因であると思います。

2番目に書きましたが、教育課程だけではなくて、一方で、地理が受験科目にない大学が増加傾向にあるということもあります。でも、大学側の言い分では、結局、地理で受験する人が少ないから、受験科目から減らす。そうすると、受験科目にないから、今度は履修しないという悪循環ができてしまっているんです。経済性からいくと成り立たないから、大学側の言い分は理解できるわけです。しかし、大きく教育の面で見ますと、やはり教育をゆがめる遠因になっていると言えるかと思えます。

それから、履修者が減っているというのは、地理教育をできる教員が減少している。社会科は必修です。社会科、地歴科の単位数が減っています。ですから、先生の採用も少ないです。そこにきて世界史だけが必修ですので、先生が辞めて新しい先生を採ると、大体世界史または日本史を専攻してきた学生を先生として採用することになりまして、地理を専攻してきていない学生が教えることになるわけなんです。そうしますと、例えば地理の授業内容の大項目としてある地域調査などは、経験したこともないし、地図も使ったことがないような人が地理を教えることになる場合が出てくるわけなんです。というわけで、本当の地理を教えられる教員が減少していると言えるわけです。

そういうことがずっとありまして、本当はそれを数で示したかったんですが、なかなかそういうデータがつかないでいます。

あとは、2007年問題ということが言われていますが、世界史が必修になって以来、地理の先生は採っていないんです。そうしますと、地理を非常にたくさん教えていた時代の先生がちょうど2007年問題でお辞めになることが多いんです。

それを示したものが、小林正人さんという方が書いた「高等学校地理教育の危機」というものがございます。古今書院から出ている雑誌『地理』に、この方が書いているんですが、77ページに「表3 東京都立高等学校『地理』教員年齢構成」があります。これは東京都です。これは2004年版ですが、このようなパーセントになっています。

話で聞いているのは、東京都で20年間で地理を専門としてきた人は、2人しか採っていないということは聞いています。今年は少し採ったようです。辞める先生が多いので、1人か2人は採ったようですが、現状はこのようになっています。

そうすると、こういう方たちがお辞めになると、地理を本当に教えらる先生がいなくなってしまうというわけで、まさに空間的な認識力や地理的な考え方、見方を考えられる、そういう教育ができる先生がいらない。そういうふうに学ばずして卒業する子が多いというわけで、それがどんどんひどくなるのではないかとということで、非常に危惧しています。

もう一つ、下に書いてあるのは、地理の履修機会がない学校も見られる。これは結構あります。学生も先生私は地理取りたかったのになかったとよく言います。これはやはり地理を専門としている先生がいらないこともありますし、受験科目を考えると、地理は開講しなくてもいいというような高校も随分出てきているというわけです。こういうようなことで、地理履修者がますます減少しているということが言えると思います。

問題点としましては「2）教員養成課程についての問題」がかなり明らかになってきていると思います。教科に関する科目の最低履修単位数が非常に少ないんです。それは社会科、地理とかそういうことではなくて、最低単位が少ないです。というわけで、専門の教科に関する科目を学ぶことが少ない。そうすると、地理を学ばなくても小学校の先生になって社会科の先生になれるんです。

小・中・高それぞれで身近な地域という学習指導要領の中の大項目があるんですが、そこで地域調査というものが体験学習の面からでも非常に重要視されるんですが、先ほど言いましたように、地域調査の経験もない。だから、その意義や方法を十分に理解していない教員が少なくないんです。それもちゃんと教えられないというわけです。地理歴史科の科目についても、地理を最低限取るとせいぜい概説と地誌を取ればいいだけで終わってしまうんです。ということで、教科に関する科目、専門性の力がついていない先生を養成されていることは問題であると思います。

次の問題は「3）地図指導が不十分」であるというわけで、地図というのは現実世界を空間的にわかりやすく認識できるように示したものです。自分を地図の中に位置づけられるような見方、空間的な見方ができる。そうすると、他地域とここの地域の結び付きなり客観的に広い視野でとらえる見方ができる。それには、地図教育が非常に不可欠なんです。

しかし、文科省の小・中学校の教育課程実施状況調査を見ますと、地図で調べたり見たりしますかということをして中学1、2年生に聞きますと、そうしているというのは4分の1ぐらいなんです。4分の3がそうしていないとなっている。指導ができていないということは、まさにそういうことでも如実に表れていると思います。

地図の上で物を考えられるというのは、やはり大事なことではないかとということで、そういう教育がなされていないのは、問題であると思います。

レジュメの2ページでは「アンケート調査結果から」ということで、結果から考えられることを書いておきました。

時間が過ぎているんですけども、ちょっといいですか。もう時間いっぱいですね。

福井主査　そろそろ閉めていただかないと、時間がなくなってしまいます。

滝沢先生 2ページのところは読んでいただければわかるかと思うんですが、アンケートは地名を聞いただけではなくて、地名や位置を認識するということは、世界の多様な現象を理解したり、直接体験できない事柄でも現実味を持って考えられるための基礎なんです。それがしっかりできていないということを書きました。

その次は、地図が頭に描けないような状態になっている。

3番目は、グローバル化する現代社会でも、国際社会において日本が確固たる地位を築いていくには、国際感覚を身につけなければいけない。それは国土認識なり国の領土というものに対する認識、自分の国の文化、そういうものについての認識です。それがちゃんとできていないと、他国についてもそういうことがある。理解できないわけです。そういうのは、地理教育で培われるものである。それができていないということがあります。

最後に他国の例を資料として、お付けしておきました。ちょっと厚いんですが、諸外国の例を見ても、歴史を地理より優先させている国はない。生徒の人間形成の上では、地理と歴史をバランスよく学ばせるような教育が必要であるという認識は、諸外国では常識になっている。現在、日本では非常に偏った教育を行っている結果になっているということだと思っております。

長くなりまして、済みません。

福井主査 ありがとうございます。

では、戸所先生お願いいたします。

戸所先生 今、滝沢先生からお話がありましたように、現在、地理が高等学校で選択になっていることから、何が問題なのかなと考えたときに、実は思っていた以上に、あるいは考える以上に大きなことは、地名アンケートの対象者が旧帝大クラスや慶應、早稲田あるいは立命館、私の大学など、こういう言い方はどうかと思いますけれども、それなりに大学として評価の高い大学の学生たちがかかなり認識力を持っていないことです。

その要因の一つは、先ほどもお話がありました高等学校の先生で、仮に地理を選択しても教えられる先生が少ないということです。地理学は大学では実験実習講座に分類されるように、社会でも比較的技術的な要素が多くあるわけです。例えば地域調査法や地図の読解力、GIS（地理情報システム）はコンピュータの操作が必要となります。そういうものや、いろいろなもので歴史とは違ったツール、技術が要るわけです。

地理学の教育を受けた先生が教える学校の生徒は、割合に地理の授業を楽しんでいます。しかし、現在では地理の教員採用が少なくなるとともに、今度は辞める人がどんどん増える状態の中で、地理教育そのものが崩壊してきているということが地名認識力低下の大きな原因です。

他方で、社会の要請を考えると、生物多様性ととも地域多様性についても私たちは同じように見ていかなければ、国際社会では生きていけないし、日本を政府が目指す分権型社会にすることもできない。教育システムの中で地理は、今まで大きな役割を占めてきたが、地理を正しく学ぶ生徒数が減少することで、地方分権も進まず、地方がなかなかうまく動かない1つの遠因になっていると考えています。

私がお配りしましたレジユメを見ていただきたいと思います。1枚目のところにある「知識情報

化社会における地理教育の意義 - 地域多様性を理解し国際社会に通用する人材を養成 - 」が、もう一つうまくいっていないということです。そこで、「1 . 地理教育を取りまく社会の変化と問題点 - 地理未履修がもたらしたもの - 」として何があるかということです。

1つは国民の「1) 東京中心の情報発信への絶対的信頼」です。東京以外にもいろんな地域があるということを理解できない中で、一方的に多くの情報が東京から出ることで、その情報に対して信頼感を置いてしまう。その結果、変な書き方かもしれませんが、「一般社会においては東京中心の情報発信で洗脳」ということが起こっていると思います。

地理未履修がもたらした第2の問題点は「2) 資本の論理・経済の論理・強者の論理を優先する社会への変質」です。いわゆる格差社会と言われておりますが、東京への人・物・金・情報の集中・集積が非常に多くなる中で、地方を見下す大都市中心主義が蔓延してくる。

私自身はこれまで京都で30年、ふるさとの群馬で30年という生活をしてきました。地方から見ていると、分権社会だとか地方の時代といいますが、東京中心あるいは大都市中心の考え方が、ますます強くなっている感じを受けます。

地方で働くというよりは東京が有利であるという意識が強い。企業の本社が東京に集中しているため、何となくすごろくの世界のように、東京が上がり地点になる。そういう中で、地方や発展途上国等に関する見方が非常に弱くなっていることが大きな問題点であります。

夕張問題に関しても、夕張の税金が高くなれば、経済の強いところへ移転すればよいと考える人々が市民にも市民以外にも増えてきているといわれます。これでは多様性ある地域社会は創れません。

地理未履修がもたらした第3の問題点は「3) ネット情報に関する是非の判断基準の不明確化」です。ネット社会になって情報が溢れていますが、その清濁をとらえる力が実は弱くなっており、情報に振り回されている感を否めません。

また第4の問題として「4) 時空間的思考の欠如」があります。先ほどからも出ていますように、広域的・長期的視点に欠けた行動が多くなっています。また、時空間的思考の欠如は危機意識の欠如に繋がり、防災に対する関心の低さとなり、政府の震災対策にも影響を及ぼすでしょう。

時空間的思考の欠如からスケール違いを理解できない人が増加しています。私は1年に1回、学生を東京に連れて来ます。その際、例えば六本木ヒルズを見せます。学生は21階建ての高崎市役所より少し大きなビルとしか見ない。しかし、六本木ヒルズの建設費は全体で6,000億円。6,000億円ということは、高崎市の年間予算1,000億円の6倍です。でも、学生たちは高崎にある建物と同じように思ってしまう。しかし、全然規模が違う。スケールが理解できなくなっています。

読図・空間表現のできない有名大学の卒業生、大学院生がいます。車のカーナビの指示通りに行動する学生も多い。場所によっては、カーナビの指示より近いルートがあってもカーナビの地図を使いこなせないでいる。

地理未履修がもたらした第5の問題点は「5) 我が国の国土の位置と領域に関する知識の欠如」です。日本国の国土及び領土について、果たしてしっかりとわかっているのだろうか。これは政治的な問題としても、今後、ゆゆしい問題になるのではないかと思います。

第6の問題点は「6）GIS教育の不徹底による国際競争力の低下」です。GISの進化は著しく、地理未履修によって基本的な認識を持っていないことは、これからの若人たちの国際競争力という点で懸念されるわけです。

そこで次に、「2．今日の地理教育に必要なものは何か - 他の教科では不可能な社会が求めるもの - 」について考えてみます。

第一に「1）知識・情報整理箱の構築とその応用力養成（必修時代の常識が通用しない環境への対応）」があります。実は地理の授業で世界地図あるいは日本地図を学ぶ中で、図書館の地域的・分野的に体系化された書棚のように、頭の中の地図・空間に新しい知識を整理しながら入れることができるようになります。そうした空間認識・頭の中の整理箱が地理未履修によってできないため、情報を整理できない頭になってきていると思います。やはり歴史と地理の2つをきちっと学ばせ、時空間認識を養成することが重要だと思っております。

地理学習の効用の第二は、「2）地図力の養成」ですが、これは先ほど滝沢先生が言われましたので、割愛します。

地理学習の効用の第三は、「3）国土・世界の空間的循環システムの理解」です。有識者の多くが共通して、地域を認識する上で地理の総合力は必要と言っていますが、これも時間の関係で割愛します。

地理学習の効用の第四は、「4）災害などへの危機管理能力と復興力の育成」です。これが非常に弱くなってきている。いろんな情報といろんなツールが出てきていますが、実際にそれを使いこなす基礎的な力が弱くなってきていると感じます。

例えばインドネシアの大津波があったときに、イギリスの高校地理の授業で津波を学んでいた女生徒が、旅先であったが津波であることを察知して周囲の人に伝え、多くの人を救ったという。今日の日本では、自然現象と人間をつなぐ地理教育の重要性が忘れ去られていると思っております。

地理学習の効用の第五は、「5）時空間的思考と広域的長期的視点の養成（時間スケール・空間スケールの理解と活用）」も重要ということです。

地理学習の効用の第六は、「6）現代の問題点やその状況と歴史的経過を提示（現代史の理解を深め未来を指向する地理）」するということで、地理の教科書を見ればおわかりいただけると思いますが、単にどこに何があるということだけではなく、なぜこうなったのか。あるいはどういう歴史の下でこうなってきたかということが書いてあるわけです。したがって、その意味では、非常に現代史的な面も持っているわけであります。

次は、「3．目指すべき地理教育の視点」についてです。

その第一は、「1）知識情報化社会の構築に資する地理教育：『スキル』に加えて『発想・志向』を重視する」ことです。地域間格差の是正と地域間における相互理解の促進が非常に重要になっています。そこでは上下意識や差別意識の解消が重要です。

私は国会等移転審議会の委員をさせていただきました。その時、意識調査が行われましたが、東京に住んでいるだけで地方の人より偉いと思っている東京人が半分以上いました。東京が上で地方は下という感覚です。これはやはり地域多様性、生物多様性を活かした新しい時代、地方分権時代

を構築していく上において、非常にマイナスな面があると思います。開放型水平ネットワーク型の社会・国土構造を構築していく上で、この教育は重要であります。

第二の目指すべき地理教育の視点は、「2）生きる力とその基盤たる地域づくり力の育成」で、様々な現場でフィールドワークができ、空間的に様々な情報を整理する能力が重要ということです。このフィールドワークの教育が、地理学的訓練を受けない先生方には難しいのです。そのため、生徒を現場に連れて行っても生徒を惹きつける授業ができない。

私は地理学を学び、そして地理学教室に30年いた後、今は地理学の研究分野を地域で応用する地域政策学部にはいますが、地理学が地域政策には非常に役立つことを実感しております。地理教育は地域形成能力、地域運営能力の育成にも役に立つわけで、地方分権時代を支える教育として非常に重要であります。また、地理教育は危機回避能力育成の点でも、非常に重要です。

最後に申し上げたいことは、自然現象と人文現象を一体として見る教科は、地理以外にありません。理科の知識や社会科など人文・自然に渡る教科を学び自然現象と人文現象を一体として見ることで、人間は何をすべきか、初めて地表上にいる人間の行動がわかってくる。これを一体として教育していくことが非常に重要です。地理教育の真価、哲学がわからない先生が多くなると、ただ単にどこに何があるか覚えなさい的授業が多くなってしまいます。

したがって、学習指導要領で地理を是非重点化していただきたい。また、教員養成及び地理教育のできる先生方が活躍できる場を確保していただきたいと念じています。

以上で、とりあえず、終わらせていただきます。

福井主査 ありがとうございます。

それでは、質疑とさせていただきます。御自由にどうぞ。浅見先生、どうぞ。

浅見専門委員 先ほど社会科の科目が大分減ってきたということがありましたけれども、一方で、生活というのが大分増えていますね。実際、私のところにも小学生がいるんですが、生活の中はかなり理科的なものと社会的なものが混在して入っています。勿論、これはプラス総合なので、やはり数の上では若干社会は減っているかもしれないけれども、恐らく生活の中に社会科を補てんするものが入っているのではないかと思います。にもかかわらず、社会という部分に着目しなければいけないのは、生活というものに社会の基本たる、ある種の覚えなければいけないものが欠けているということなんでしょうか。

滝沢先生 生活科は小学校の1年、2年なんです。ですから、1年、2年で理科と社会を一緒にしよう。だから、教科書を見ると葉っぱを取りに行き、落ち葉を拾ってきたりとか、川はどうなっているかを見る。そういうのが生活科の内容なんです。一応、社会科の中での一部として扱うような内容も入ってはいるんですが、それは1、2年生で社会科という見方ではないんです。

小田原委員 これは多分同じだと思います。社会か理科を生活を呼んでいるだけですから、中身的には総合とは分けて、理科、社会の中に数字としては入れるべきではないですか。

浅見専門委員 入れても、もしかしたら減っているのではないかと思うんですけれども、これで見ると、やや事実認識と違う可能性はあるのかなと思いました。

もう一つ伺いたいのは、同じように日本史も言わば選択に追い込まれた科目なわけです。日本史

と地理とを取り巻く状況が、聞いているとかなり違っているようにも聞こえるんですけども、それはなぜなのでしょう。

滝沢先生 私の考えでは、本当に日本人は日本史、歴史が好きだなというのはあると思います。特に実感するのは、オープンキャンパスなどで来ると、何しろ歴史が好きだ。歴史の先生に言わせると、あれは歴史が好きなのではない。要するに、テレビドラマで何々が好きになったからとか、戦国時代の武将が好きだとか、それについて知りたいとか、そういうことなんです。日本史の先生に言わせると、日本史そのものの教育が少なくはなっている。危ういとは言っていますが、ただ、履修する生徒からすると、やはり日本史は好きだというのはありますし、世界史と同じように歴史と一緒にやれば楽ということもあります。

一方で、地理は面白くないというのが出てきてしまう。それは先ほど言った、地理をちゃんと教えられる先生がいなかったということがあるんだろうと思います。

福井主査 戸所先生、どうぞ。

戸所先生 日本人は国民性でしょうか、時間的に物を判断していくことは、割合に優れていると思います。何かにつけて時間でものを考える。お前は私より若いとかまで含めて。他方で、空間的にとらえる感覚が非常に弱い。例えば大学でも、歴史関係の学部や学科はたくさんあります。そこから非常にたくさんの高校の歴史教員が排出されます。しかも、高等学校でも中学校でも技術的に歴史の方が教えやすいこともあります。

こう言ったら失礼かもしれませんが、例えば法学部を出た方でも、歴史は何とかなる。ところが、地理は技術的な分野があるため、専門教育を受けていないと難しい。そのため、教科選択において地理教員でない限り敬遠します。

それから、世界史と日本史とを一体でする方が、教えやすいともいわれます。私の教え子たちで高等学校にいる人に聞くとそのように言います。地理は異質なだけに意図して教育する必要があります。大学の教室でも歴史は文学部にありますが、地理は大学によって理学部であったり、文学部にあったり、しかも実験実習講座です。逆に言えば、だからこそ、これから国際認識や空間認識を生徒に教育するには地理教育が必要となります。

福井主査 戸田先生、どうぞ。

戸田専門委員 私どもは、いわゆる学習指導要領についていろいろ勉強させていただいているんですが、地理教育が非常に大事だということをお教えいただきまして、ありがとうございます。

ただ、私も別に文科省の肩持ちをするわけではないんですけども、現行の学習指導要領では、御案内のように、中学でいわゆる地理的な分野と歴史的な分野をやっております。そして、歴史的な分野は主として日本史をやる。地理的な分野では、勿論、地理をやる。3年生で公民をやる。こういう形になっている。したがって、高校では中学でやっていない世界史を必修にする、必然性がそこにあるだろうということが1つ考えられるわけです。

それから、先ほど滝沢先生の御説明にあったように、平成元年のいわゆる社会科の解体の趣旨というのは、それまで日本の社会科というのは座布団型の学習が主として中心でした。これは非常に無駄が多い。そこで座布団型ではなくて、いわゆる二本柱のようなパイ型にやっていこうことがも

う一つあると思います。

そして、そこへ総合的な学習が入ってきた。総合的な学習というのは、非常に地理的な要素が本来強い。実際、現場の先生が実施できるかどうかは別問題として、理屈の上では、どうしても郷土の周辺の遺跡を見て歩きましょうだとか、あるいは自分の家や学校の周辺の地理を調べましょうというような調べ学習が非常に多い。学習指導要領の全体の視点からいくと、そういうところで、地理の知識をある程度習得できるであろうという立場に立っているのではないかと私は推測するわけです。

その中で、例えば、今、先生方が御主張なさったように、そういう客観的な認識あるいは地理教育等が非常に重要である。それをどういうふうに現在の学習指導要領に具体的に入れ込んでいけばいいのでしょうかということをお聞きしたい。

もう一つは、総合的な学習の中で、どうやって地理的な要素を盛り込んでいくべきか。

この2点について、両先生から御教示賜りたいと思うわけですが、よろしく願いいたします。

滝沢先生 先ほど中学で日本史をやって、だから、世界史を高校でやるというのは、確かに世界史を必修化したときの説明だったわけです。

実際に指導要領はどうなっているかといいますと、地理の場合は、中学校では日本が中心なんです。世界を中心にやるのは、高校なんです。そういうことを言うと、日本史、世界史、日本地理、世界地理だとすると、世界地理は完全に抜け落ちてしまうんです。

戸田専門委員 そうすると、中学は義務教育で全員が履修するわけですが、中学の地理的な分野で日本地理を中心としたものを、逆に世界地理を中心にするとか、そういう案も考えられますか。

滝沢先生 そうすると、日本についてどこで学ぶんだということになるんです。実際に指導要領改訂のときに、都道府県名も教える場所がなかったんです。現在は中学1年生で覚えることが入ったんですけれども、それはなぜかという、今の大学生もそうなんですけれども、何しろ日本の白地図を示して、都道府県名、県庁所在地を書かせても満点を取る子は本当にいないです。惨たんたるものなんです。それはどこも覚えさせるところがなかったからなんです。

それは問題だということで、前回の指導要領改訂のときに、そういうことを覚えさせるのは小学校がいいのではないかということで、小学校の指導要領にそれを盛り込もうとしたわけなんですけど、結局、完全5日制に移行するので、内容を減らさなければいけないということで、新しく小学校に盛り込めないことになって、都道府県名も中学校に入ったというわけで、小学校では日本地理という形では学ぶところが全然なかった。中学校で日本地理を習う。世界地理を中学校で教えるとなると、日本については小学校で教えるかという、それも難しいようなんです。そういう意味では、中学校に世界地理を入れたらどうですかと言われても、今、授業時間数が限られているところで、それを入れたら、どうなんだろうというのが、まず1つあります。

戸田専門委員 例えば高等学校の場合、今、公民分野と地歴で必修指定があるわけですが、その必修指定をとって、地歴の方は地理と日本史と世界史を自由選択にするという考え方について

は、いかがでしょうか。

滝沢先生 そうすれば、大分違うと思います。

戸田専門委員 そういう考え方には、御支持なさるとのことですね。

滝沢先生 はい。諸外国の例でも、何しろ世界史だけ必修というのはいないんです。

福井主査 先進諸国中で、世界史だけが必修というの、全く例がございませんか。

滝沢先生 先ほど資料としてお見せしたものにもあります。

福井主査 何か国ぐらいについて調査されているんですか。

滝沢先生 お配りしたのものにあるかと思いますが、アンケートの方にも書いておきましたが、イギリス、フランス、ドイツ、シンガポール、中国、韓国、台湾、日本という表がありますが、アメリカについては州ごとなので全部網羅できないんですけれども、まずはこのぐらいです。教科カリキュラムの改善に関する研究からのものなんです。そういうものが全世界のいろんなところでできていけばいいんですけれども、まだそういうのが進んでいけませんので、今のところはここまでです。

福井主査 大まかに言えば、小・中・高で自分の国の歴史と世界史と地理という区分が、世界各国では多いんですか。

滝沢先生 地理と歴史という区分がまずあるわけです。

福井主査 地理は当該国地理と世界地理を含み、歴史は当該国歴史と世界歴史を含むということですか。その場合に、地理と歴史でどちらかにウェートを置いている国は、日本以外にはないということですか。

滝沢先生 まさにどちらかにウェートというよりも、本当に必修になっています。自国の歴史に重きを置いている国は少しはあるんですが、日本ほど激しく差をつけているところはないです。

福井主査 今、戸田専門委員から申し上げたように、高校までで、例えば当該国歴史、世界史、地理、あえて言えば政治経済みたいなものがあるんでしょうか。例えば4科目程度の中から、自由に2科目なら2科目を選ぶという国もあるんでしょうか。

滝沢先生 そこまで詳しくはわかりません。

戸田専門委員 公民は必修の国が多いです。

福井主査 地理、歴史は選択ですか。

戸田専門委員 それが多いですね。

福井主査 地理、歴史の選択という国は、どこかあるんでしょうか。

滝沢先生 地理、歴史の両方が選択性ということですか。

福井主査 要するに、地理、歴史のグループから、自国史と海外史と歴史の中から、任意の1つなり、2つを選べばいいという国はないんですか。

滝沢先生 ないです。やはり地理をちゃんと教えるべきです。結局、一番最初に申し上げたように、物を見る場合は、歴史の面でちゃんと見る。空間的に見るというバランスのとれた見方が絶対に必要だという認識は、先進国ではちゃんとあります。

福井主査 論点は、特に高校段階ですね。中学校までは、ある程度概略はやるわけですね。恐らく諸外国もそうだと思うんですが、高校段階で深い学習をやるときに、地理分野と歴史分野で、例

えば地理だけでいいとか歴史だけでいいとか、そういうのはないんですか。それは必ず同じウェイトで、両方とも必修でやらせるんですか。

滝沢先生 同じウェイトでない場合もあります。自国の歴史に少し重きを置いてあるということは、見受けられます。

福井主査 高校段階では、日本がそうであるように、海外の地理などを中心にやる国が多いんでしょうか。自国の地理を中学校段階までやって、高校段階は海外の地理ということですか。

滝沢先生 国によって違うものですから、中学校段階までは細かいことは一切やらないで、高校から本気になって自国の地理をやるところもあるんです。だから、一概に言えないですし、それについての資料は今はありません。

福井主査 日本の高校教員ですが、高校課程の地理の専門の先生がいないところがあるという趣旨でしょうか。

戸所先生 地理の専門の先生がいない高校はとても多いです。

福井主査 例えば世界史の専門の方が日本史も地理も両方を教えたりとか、そういうことを意味するんですか。

滝沢先生 そうです。

福井主査 今、高校では分かれていないんですか。

戸所先生 分かれていません。

滝沢先生 教員免許は地歴科です。地理、歴史です。

福井主査 私の個人的経験だと、高校時代は地理と日本史と世界史は先生がはっきり分かれていたんですけども、今は違うんですか。

滝沢先生 それは必修だったからだと思います。

小田原委員 昔は社会科で地歴公民と分かれていないから、世界史の教員で採用していたわけではないんです。

福井主査 実際上は分離していたように思います。

小田原委員 受験の対策等もございまして、進学校のほとんどは世界史なら世界史、地理なら地理のそれぞれの教員を確保しているんです。

福井主査 事実上分かれていたわけですね。

小田原委員 分かれていたんです。

福井主査 なるほど。

小田原委員 だから、実際に昔も今も先生方の御指摘のような形だと言い切れない部分はあるのではないかなと思います。

福井主査 今は専門の方がもっと減っているということなんですか。

戸所先生 確かに言われるように、昔も専門ではない方が教えていた点もあります。しかし、やはり必修になっていると、それなりに各教育委員会も地理の専門教員を採用しますし、その先生が辞めた後は、後任を採っていました。

よく言われることは、例えば我々60歳前後より上の人間の場合ですと、高校で地理を必修で学ん

できました。ですから、例えば国会議員の先生方などでも、私はわかっていますと言うのですが、地理的知識を学んでいるからです。しかし、全然受けていない、これからの若い指導層はどうなるかという、地理的知識を持たずに外交や国政に当たる人が多くなり、問題になってきているということなんです。

時空間で物を見るという中で、やはり国民教育としては、地理と歴史の両方をバランスよく学ぶ必要があります。そういう意味では、戸田先生の質問に対する私の回答は、少なくとも歴史と地理をどれでも自由に取り得る選択にするべきで、一つは必修で、あとは選択というのはおかしい。可能であるならば、本来の姿は、やはり地理と歴史の両方を必修にして、バランスよく学ぶべきだと思います。

福井主査 日本史も地理も必修の方がいいということですね。

戸所先生 はい。私は時間数を少々減らしても、バランスよく学び、そういう感覚でこれからの指導者を育てていくことが重要と考えています。

特に高等学校の場合は、日本を背負う指導層を育てるため大学へつなぐ位置にあり、非常に重要な年齢です。中学と大学の間が切れてしまいますと、大学での教育にもうまくつながりません。私は時間数を減らしても、できればバランスよく地理と歴史の両方を取る方が良いと思います。

福井主査 今の高校生の履修の動向としては、世界史はいずれにせよやらないといけないわけですね。そうすると、あとの日本史、地理という分布ですと、何%ぐらいの高校卒業生が日本史と地理をやっていることになるんですか。

滝沢先生 それは先ほどの教科書の需要です。

福井主査 地理が最低ということで、非常に人気がないわけですか。

滝沢先生 その3つの中ではね。

福井主査 日本史の方が人気があるわけですね。

滝沢先生 はい。

教えられる先生がいるかないかも大きいと思います。現場の先生からよく聞くことは、地理は勘弁してほしい。ほかのは何でも教えるから、地理だけは勘弁してくれという先生が結構います。

福井主査 日本史も地理も両方取る子も結構いるんですか。

滝沢先生 いるとは思いますが。

福井主査 それは学校ごとに全部選べるんですか。

滝沢先生 そんなことないです。いないです。大体世界史が必修ですからね。

福井主査 世界史は当然やるとして、プラス地理だけ、ないしはプラス日本史だけなのか、日本史も地理もやる子が結構いるのかというのは、どうなんでしょうか。

滝沢先生 その辺はわかりません。

福井主査 重なり具合はよくわからないんですね。

滝沢先生 そこまでのことはわかりません。

戸所先生 やはり生徒からすれば、受験を考えますから、できるだけ数の少ないところに集中しますから、よほど奇特な者でないと、3つを取る人はいないのではないですか。

福井主査 理科系の受験だと、2教科要るんですか。世界史プラス地理とか、世界史だけなど1教科だけとか。理科系が2科目とか。

滝沢先生 それなんです、今、半数が地理を学んでいないと言いましたけれども、でも、半数は取っているのではないかといいますが、それは理科系が多いんです。私が大学で最初にアンケートを取るんですけども、法学、経済、文学を合わせて見たときに、大体2割弱です。多くても2割が地理を高校のときに学んでいた。文系ですと、2割ぐらいしか取っていない。

福井主査 理科系の子は、せっかく世界史が必修なのにそれで受けなくて、地理で受けるの子が多いんですか。

滝沢先生 多いんです。やはり物を考えたりするので、易しいらしいです。

福井主査 暗記量が少ないんですね。

滝沢先生 そうです。

戸所先生 要するに、考えるという技術面がありますし、しかも、A、BとやるうちのAを取る方が多いんです。

福井主査 済みません。AとBはどう違うんですか。

戸所先生 単位数が2単位と4単位です。

福井主査 単に詳しいか、まばらかという違いですか。

戸所先生 若干違いますね。

滝沢先生 違う科目ではあるんですけどもね。

福井主査 基本的にはBですか。

戸田専門委員 Bが通史、Aが近現代史です。

福井主査 歴史だとそうなるんですね。

戸所先生 地理ですと、問題発見型のなものがAで、地誌的なものを重視するのがBで、どちらかというとならAの方です。

福井主査 理科系の子は、Aで受験できてしまうんですか。

戸所先生 A、Bというのは、受験のときにはみんな同じです。

福井主査 大学ごとにAとBの両方を置いている学校が多いわけですか。

滝沢先生 というか、地理という科目になります。

福井主査 Aの勉強だけで受かるんですか。

滝沢先生 Aの勉強だけでもできるように、一応、問題はつくっているところが多いです。

戸所先生 結局、大学も高校もどの様な採り方をするかで、大学の方も影響されてきますし、大学のことが高等学校にも影響されますし、その辺はお互いの自然のバランスで決まってくるということでしょうね。

福井主査 そうすると、先生方の予測ですと、仮に自由選択制になったとすると、世界史の必修をやめて、世界史、日本史、地理から、例えば1教科とか2教科とか、何らかの自由選択になったとしたら、世界史のシェアというのは、どの程度減ると思われますか。地理より不人気になるのか、地理よりは人気があるだろうと考えるか、どうでしょうか。

滝沢先生 センター試験の受験者で、一番多いのは日本史なんです。その次に地理なんです。それから、世界史なんです。

福井主査 ということは、必修であるにもかかわらず、世界史はそんなに人気がないということですか。

滝沢先生 どういうふうに言っていていいかわからないんですけどもね。

白石委員 出る範囲が広いから、どこが出るかわからないんです。

福井主査 勉強が大変だということですね。

滝沢先生 大変なんです。

戸所先生 未履修問題というのがありましたね。あれは、世界史を学ばなければならなかったのです。

福井主査 ほかの教科のニーズが強いから、サボったというのが実態だったわけですね。

戸所先生 だから、そういうこともあるわけです。あれは実はこの問題がバックにあるのです。

福井主査 受験生にとっては負担が重いのに必修になっているから、脱法行為が横行することにもなるんですか。

白石委員 だから、高校の授業でも世界史の授業を受けつつ、受験勉強で日本史の参考書をやっている子がいっぱいいるんです。

福井主査 そうですか。

白石主査 だから、先生方のおっしゃる御意見を伺っていると、学習指導要領をどうするかという問題と、大学の試験制度をどうするかということと一緒に考えていかないと、学生たちがきちんと学ぶモチベーションは起きませんね。

浅見専門委員 ちなみに、今の話だと、世界史を必修でなくすると、世界史を取る人はほとんどいなくなってしまうということですね。

福井主査 そうですね。

白石主査 そうです。

小田原専門委員 今いろいろお話をいただきまして、ありがとうございました。

お伺いしたいのは、最大週 30 単位しかないわけですね。それを各教科に割り振らなければいけないわけですから、お話を伺っていると、例えば世界史の先生に聞けば、世界史も知らない子どもたちが多くなるし、大学生も知らないわけだから、やはり多くしてくれという話になると思うんですが、時間数は決まっているわけですので、そうしたら、どうしたらいいかということ、戸所先生のように 2 単位ずつでも必修に置くべきだということになります。そうすると、それぞれの教科が 2 単位という形でいいのか。そうすると、子どもたちにとって、余りいい A の授業にならない。これは受験生が、特にセンター試験を受けている子どもたちの数が極端に少ないわけですから、やはり子どもたちにとっては力になり得ない授業になってしまうのではないかという心配があるんですが、いかがでしょうか。

滝沢先生 それは教える先生次第だと思います。2 単位でも、やはりちゃんと教えれば、科目の見方や考え方はちゃんと教えられると思います。

小田原委員 先生の話になりますと、先ほど現場感覚のフィールドワークがないというお話がありましたけれども、これは今の教員を見ていると、ほかの教科の教員もフィールド感覚がない。理科、社会、国語を含めてです。その大きな問題は、研究方法といいますか、論文の書き方といったところを大学できちんとやってきていないという話があるんです。そういう点ではいかがですか。

滝沢先生 論文の書き方ですか。

小田原委員 例えば昔は卒論かゼミできちんと教えられていたのが、卒論がない大学が多い。それから、ゼミは大学の先生の研究の下請けをさせてゼミを卒業するという話になって、きちんとした指導ができない教員が増えているのではないかという話を伺うんですが、どうなんですか。

滝沢先生 例えば地理を出た学生は、そんなことが一切ないのはたしかなんです。だから、私の専門ではそういうことはないんですが、ただ、先ほども申しましたように、要するに教員免許制度で、教科に関する科目が少なくて済んでしまうわけです。だから、先ほど法学部と出てしまいましたけれども、例えば法学部を出た人が地理歴史科の教員免許を取るといったときに、地理の科目は、地理学概説が1つ、あと1つは頑張ってもし地誌を取ったとしても、地域調査を学ぶところがないとか、それこそ論文を書いてどうのというのは、一切ないわけです。ただ、4単位分の概説を聞いてもね。

福井主査 教科が少ないということは、教科以外が多いということですか。

滝沢先生 教員免許のために必要な科目があるわけです。

福井主査 教科の科目の最低履修単位が少ないとおっしゃいましたね。

滝沢先生 ですから、その方が例えば法学部で卒業するためには、法学部の単位は勿論卒業単位に必要なわけで、言っているのは、教員免許のための単位なんです。

福井主査 逆に教員養成課程の履修で要求する科目は、教科に関する科目以外が多いということではないのですか。教科に関する科目以外に、何かあるんですか。

滝沢先生 教育原理とか教育法などがあります。

福井主査 この御趣旨は、そういうものが多過ぎるということを含むんですか。

滝沢先生 多過ぎるのではないんです。それは含んでいません。むしろ、教員免許のための単位はもっと、要するに勉強させるべきだということで、単位は増やすべきではないかと思います。

福井主査 例えば地理学科を出た方が地理の先生になるときに、教育原理や教科教育法みたいなものをもっとやらせるというのか、あるいは地理固有の専門知識をもっと学ぶべきだということなのか、どちらですか。

滝沢先生 地理を出た人ということではなくて、地理も出た人も法学部の人も経済の人も、地理を教える免許は取れるんです。それが現状です。ですから、地理を出た人は勿論地理の専門知識がたくさんありますから問題ないんですが、地理を高校でも学ばなかった人も地理歴史の免許を取れるわけです。取れる条件として、地理については何を学べばいいのかという最低限は、大学でせいぜい2科目学べばいいなと思います。

福井主査 先ほどからおっしゃることを総合すると、やはり地理の専門教育を受けた方に高校の先生になってほしいと御主張されているわけですね。

滝沢先生 それはほしいです。

福井主査 御趣旨からすると、大学で地理の勉強もしていなくて、法学部を出たり、あるいは地理と関係ない学科を出た方が高校の地理の先生になっても、仕方ないのではないですか。こういうことと、どう関係するんですか。

戸所先生 こういうことなんです。地理学科を出た人であるならば、地理の専門教育を受けた人であるならば、今の卒業論文なりフィールドワークなりをみんなやっているわけです。これで100単位以上取るわけですから、十分です。それ以外に、法学だとか必要なものを取りますから、地理教育を高等学校でできるのですが、逆に例えば法学部を出た方が地歴を取るとなると、地理に関する技術的なものや論文の書き方とか、それは一切やらなくても、地誌と幾つかを取れば免許は取れます。その方は地理を教えられますが、ある高等学校でそういう先生ばかりがいたとする。その先生方は、この学校では世界史以外に、日本史と地理のどちらを取りますか。どちらを選択の学校にしますかといったときには、地理は教えられないから、日本史にしましょうとなる。そのことで地理の選択率が減る。そうすると、生徒の方で地理をやりたいのに取れないということも出てくる。そこであのようなことが起こっている。

そういうところで仮に無理をして、教育力を持っていない先生が経済の方は教えられるとしても、そういう先生が地理を教えるとなると、どうも生徒から見ると、もう一つつまらない。

福井主査 恐らく法学部を出た人を幾ら再教育しても、あるいは幾ら教科に関する科目で地理の科目を増やしても、やはり地理学科を出た方にはどうしてもかなわないのではないですか。

戸所先生 それはそうです。

福井主査 恐らく中学まではともかくとして、高校レベルで地理や世界史を教える方は、先ほど小田原委員のお話にもあったように、本来はそれに専業で、ある程度深く勉強して、フィールドワークやら論文の書き方もトレーニングを受けた方が、地理だけに特化して高校なら教えるというのが望ましいということになりますね。

戸所先生 そういう点でいいますと、現実を申し上げますと、例えば教育委員会の方で採用するときに、地理の先生が仮に受けても、地理を取る学校が少ない。そうすると、新採用として、地理でないものを採りましょうということになるのです。

福井主査 地理専攻の方のニーズが少なくなっているということですね。

戸所先生 そうです。同時にもう一つの現実として、例えば採用側にも地歴の中で地理でない方が多くなってくると、やはりそちらの方を採りましょうということになるようでもあります。

福井主査 近い分野の方が増殖するということですね。

戸所先生 はい。

戸田専門委員 もう一つ、こういうことがあるんです。歴史の場合は、日本史、世界史という専門は別になくて、両方汎用性があるわけです。それから、歴史の方々は、割合公民も持てるんです。公民という科の場合には、法学部や経済学部出身の方というのは免許が取りにくいから、ほとんど教員になりません。

滝沢先生 公民を持てるというのは、高校の話ですか。

戸田専門委員 高校の話です。

滝沢先生 高校だと公民科と地理歴史科で、教員免許は別です。

戸田専門委員 今は別ですけども、先ほど申し上げた平成元年の社会科の解体までは一緒でしたよね。

滝沢先生 一緒です。

戸田専門委員 ですから、学校の中によっては、例えば公民の現社と日本史を持つとか、そういう持ち方を今もいっぱいいるわけです。だから、その場合、歴史出身のものが比較的多いというのは、公民も持ちやすいという汎用性が背景にあるんです。

失礼ながら、地理の先生方は、例えば公民の政経や現代社会を持つのは非常に持ちにくいと思います。

戸所先生 そんなことないです。

滝沢先生 むしろ、歴史よりは地理の方が持ちやすいと思います。

戸田専門委員 それはできないとかできるという意味ではなくて、現実に地理の先生が政経を持つというのは、余り持ちたがらないということはありません。

滝沢先生 どうなんですかね。

福井主査 戸田専門委員は、実際に高校で社会を教えてこられているので、非常によく御存じです。

戸田専門委員 教育委員会で地理よりも歴史の方を比較的多く採るという傾向は、もう一つはそういう事情があるんです。社会科の免許の時代の教員は、公民と地歴と両方もてるのです。だから内部でこういうふうに通融をつけやすいということがあるんです。

滝沢先生 ただ、それはかつての話です。

戸田専門委員 いいか悪いかは別として、現実問題としてあります。

滝沢先生 20年近く前から、公民科と地歴科は分かれています。

福井主査 実際に私が見聞する事例でも、政経と日本史を同じ人がやっているというような例は、結構あります。地理の先生が政経をやっているというケースは、余りないですね。

戸所先生 私の同級生や教え子には、地理を一切持たないで、世界史、政経を持っているという者が随分います。これは結局その学校で地理のニーズがない。受験方針の関係でそうなります。そうすると、地理以外を持たざるを得ない。先ほど言いましたように、地理学をやっているならば、歴史を学ばざるを得ないのです。そして他の教科も指導できます。

福井主査 わかります。そういう意味では、人によると思いますし、まさに地域ごとなり学校ごとの実情でマッチする方はいろんなことをやられると思います。

日本史についても、同じような議論があるんでしょうか。日本史の方も世界史が必修だけなのはまずいというような動きは、日本史学会などではあるんでしょうか。

滝沢先生 学会としてどうかというのは聞いてないです。ただ、新聞などで聞いたりするのは、むしろ、学会レベルよりは自治体の教育長などが日本史必修にということで、かなり動いておられます。

白石委員 1都3県の教育長が、日本史を必修にしてほしいという要望書を出しました。

福井主査 そうですか。

滝沢先生 最近は熊本が出したそうです。奈良も小中局の局長が行ったときには、教育長が必修にしると談判しに来たとかね。

福井主査 歴史の学会と日本史の学会とで相談されているというようなことはないんですか。

滝沢先生 学会レベルでの話は、余り聞いたことがないです。

福井主査 要するに、日本史が必修から外れたことに伴って、知識に偏りがあるのではないかというような議論もあるとして、それと地理のこういう御趣旨とシンクロすると、もっと力になると思います。

要するに、世界史の方はどうなんですか。世界史の研究者の方々は、世界史が必修で大いに結構だと思っておられるんですか。

滝沢先生 それはそうだと思います。

福井主査 逆に地理学会と歴史学会というんでしょうか、日本史学会と世界史学会という区分もあるかどうか知りませんが、今、同じ地歴でありながら、何となく劣位にあるグループでもうちょっとバランスよくやった方がいいのではないかなというようなアピールになると、更に動きが定着しませんでしょうか。

滝沢先生 ただ、私が主張したのは、本当に地理とか歴史とかは一切関係なくて、教育として何を教えるべきかということから考えて、先ほど申しましたように、読み書きそろばん、時間的な時間軸で自分をとらえられる、地域をとらえられる。それから、空間軸で物をとらえる。そういう空間的に見方、空間認識力というものを備えていないといけないと思います。

福井主査 それは日本史、世界史は選択でもいいから、地理は必修にすべきだということですか。

滝沢先生 それは必修とかが一切なくてもです。

福井主査 序列をつけないといけないわけです。何かを選べば何かを捨てるわけですからね。

滝沢先生 歴史と地理というのは、両輪だと思います。絶対に両方なくてはいけないんです。

福井主査 日本史、世界史より重要だというわけではないんですね。

滝沢先生 「より」という言い方はないですよ。

福井主査 微妙な言い方ですけども、戦略的には世界史などの必修は意味がなくて、地理の方が大事だというふうに聞こえると、多分多くの方は支持しないと思います。

滝沢先生 そうだと思います。

福井主査 やはり地理や歴史は多分優劣ではなくて、一種の教養として対等な常識だと考えれば、1つだけ飛び抜けて絶対必要なものがあるのは、世界史だけでもおかしいし、地理だけでもおかしいという相対主義的な議論でない、多分支持されないと思います。

戸所先生 ですから、先ほど私も言いましたように、できれば、時間数は少なくしても皆必修にする。そこから考える力が出てきますし、自分で勉強する人間も出てくるわけです。リーダーになるような人はそのようにしますから、その芽を摘まないようにするには、どれも学べるようにすべきです。そうしないと、頭の中がアンバランスな人間ができてしまうと思います。

白石委員 食べ物と同じで、例えば色つきの野菜群しか食べなくていい。薄い色の野菜群を食べなくていいとなると、相当バランスが崩れますね。みんな食物群を同じように摂って基礎体力をつけるのか、それとも肉だけ食べているのかによって、今は肉だけ食べるというのが世界史が必修ということですね。だから、そういうバランスの問題ですね。関連づけて学ばせて、足りない部分は自助努力でも学べるという基礎体力をどうつけるかという話ですね。

この科目の変遷を見ると、相当激しく変わっているんですけども、やはりこれは世界史学者の人たちの政治的パワーの強さということなんですか。ひどい場合は5年に1回、長くて9年に1回とか、そんな感じですよ。

福井主査 何で世界史なんですか。先ほど戸田専門委員が申し上げたように、中学校までで済んでいるから、済んでいない世界史をやるんだという建前なんですか。

戸所先生 私がお配りしましたものの4枚目のところに「法改正と歩調ぴったり」という新聞の記事があると思います。そこをちょっと見て下さい。下から2段落目の辺りです。

福井主査 林健太郎さんが主張したからですか。

戸所先生 それと木村尚三郎先生です。

福井主査 そのお二人が我田引水をしたということですか。

戸所先生 我田引水かどうかはわかりません。

戸田専門委員 先ほど申し上げたように、戸所先生がおっしゃっていた議論がまさに総合的な学習というところで、いわゆる総合的な物の見方を備えさせようというわけでできてきたと思うんですけども、そこをどういうふうに活用するのか。

滝沢先生 それは世界史必修とは、また別ですね。

戸田専門委員 つまり、そういうことで時間が取られて、全体のパイが物すごく少なくなっているわけです。ですから、総合的な学習などをなくして、全部の科目を薄くする。つまり、2単位ずつやるとか、そういうお考えなのか。例えばどうしてもトレードオフみたいになりますから、全体のパイの中でどういうふうに割り振るか。それを具体的にお出しいただいた方が、説得力があるなと思います。

戸所先生 総合的な学習は総合的な学習で、私はそれなりに意味があるとは思っております。ただし、それ以上に実はディスプリンとしての認識を空間的にきちんと持つとか、歴史的な認識を持つとか、ディスプリンを教えるべきものはきちっと教えて、体系づけておくことが、実は将来、総合的に物を考える力の育成に非常に大きく役に立つのではないかと考えています。ですから、そこがなしで総合的な学習というものをどんどんやっても、教える方としては、うまくいかないのではないかなという認識は持っています。要らないとは思っていません。

福井主査 中学校での総合的な学習などは、いろいろ批判がありますね。実際に地理とか歴史の方法論を使わないといけないんだけど、先生に力量がないから感想文の羅列になるというようなことは、よく言われます。だったら、その間にむしろディスプリンをやった方がいいのかもしれないという議論はあり得ます。

小田原委員 関連していいですか。中学校も先ほどの例だと、主要教科が減って選択が増えてい

るという指摘だったんですけれども、多様化した子どもたちに対しては、今のこういう流れになってきているんですが、中学校も選択を少なくする。その流れをやめて、すべて必修にした方がいいという考えになるのでしょうか。

滝沢先生 私はそう思います。例えば中学校1年生で選択は早過ぎると思います。まさに中教審の会議などを傍聴してたりしますと、子どもの実態をよくわかっている人などは、子どもがかわいそうだとされるんです。私は同感なんです。中学1年生で、基がわかっていないのに何を選択するのか。今の子は、好きなものしかやらないという傾向がものすごいです。学生だともっとすごい。だから、その前に嫌いにもものでも大事なものはやはり与えなければいけないしということで、私は中学では選択性というのはない方がいいと思います。

一方では、すごい進んだいい考えだという感触はあるかもしれないけれども、私はあえて、子どもの実態を考えると、それはかわいそうだと思います。

福井主査 例えば高校では日本史、世界史、地理の3教科から、1つないし2つというのでもよろしいですか。

戸所先生 先ほど白石先生が言われたことにつけ加えるとすれば、嫌いなものとか好きなものがありますね。どちらかという、嫌いなものはやはり健康を保つためにはやや強制的でも食べさせなければならぬものがあるでしょう。

福井主査 3つとも必修の方がよいということですか。

戸所先生 今までのもので見ていると、日本人が一番とつきやすいのは、入試などで多いのは日本史です。日本史というのは、割合にとつきやすい。

それに対して、地理や世界史というのは、どちらかというややとつきにくい。余り食べない。そうすると、そのところは何らかのコントロールをして、バランスよくした方がいいですということが政策的に必要なのではないか。そうしないと、バランスのとれた健康な国民が生まれてこないのではないかということだと思います。

そう考えると、やはり選択もどの辺でやったらいいのか。必修はどういうふうにやったらいいか。その辺が出てくると思います。

福井主査 全部必修に戻すとなると、また負担教科だとか、いろいろと物議をかもすかもしれませんね。

戸所先生 時間数の問題というのはあると思います。

小田原委員 また教科書がすごく薄くなってしまおうという批判も出てきますね。そうことは、どうやったらクリアーできるか何かお考えありますか。

戸所先生 教科書は、外国などでも割合に厚い教科書です。それに比べ、教科書が薄過ぎるという点がありますね。教科書は全部やらなくても良いと思います。教科書はもっと読ませる形にするということもあり得ますね。だから、時間数が少なくなったから教科書を薄くするのではなくて、むしろ、読ませたらいいわけですね。そこは教育の仕方やいろいろなことで、日本の場合には無償配付したりする関係が、とにかく連動していますね。だけれども、必ずしも諸外国の場合そうではないです。ですから、自学自習で読めばいいもの、要するにエキスを教えればいいとする。ここは教

育法との関係があると思います。

滝沢先生 ただ、一番はやはり先生の養成なんです。私は一番のネックは先生の養成だなと思います。教科書を教える先生が多いんです。教科書には、ここからここは何時間と全部合わせてつくっているんです。教科書会社もそういうものをちゃんと提出するわけです。ここは何時間となっているんです。そのとおり教えていくと、1年間で済む。そういうつくりの考え方が今は多いんです。

福井主査 でも、終わらない先生もいっぱいいますね。

滝沢先生 それは先生が途中でね。

福井主査 私自身の経験では、地理でも歴史でも教科書の最後までいったためしがない。

滝沢先生 それはありますね。

戸田専門委員 教科書は薄くても、私も30年近くいわゆる副読本をつくっているものですから、よくわかるんですけども、ほとんどが学習参考書の副読本を使っていますね。特に地理などは、地図のほかに要覧とか、歴史なども全部その他副読本が3、4冊ありますし、公民などは私たちで出しているものはこんなに厚いんです。政経の教科書はこんなに薄いけれども、その5倍か6倍ぐらいあって、そこから各現場の先生たちがいろんな資料を抜き出して教材をつくって教えておられると思います。

福井主査 では、そろそろ時間なんですけど、大変勉強になりました。我々もそしゃくして、できるだけ御趣旨を踏まえた合理的な指導要領が実現できるよう努めたたいと思います。

ただ、規制改革会議ですので、単純な規制強化みたいなことはなかなか打ち出しにくいのです。

滝沢先生 改革というのは、規制を外す方をおっしゃっているんですか。

福井主査 両方あります。みんなに規制強化せよといったものは理屈があればいいんですけども、今の場合、日本史、世界史、地理のどれかだけを大事だというのは、なかなか取りにくいと思います。そういう意味では、世界史だけが特別扱いというのは世界的にも非常に異例だということは大変説得力があると思いますので、基本的には全部大事ではないか。全部大事なんだから、全部必修にするのか、あるいは対等な立場で自由に選べるようにするべきではないか。多分このどちらかではないかという気がするんですけども、それはどちらに転んでも、今よりは大分ましということではよろしいわけですね。

滝沢先生 はい。

福井主査 考えてみたいと思います。

ただ、日本史の方の動きについて情報をお持ちでしたら、御教示いただきたい。日本史については思い入れの持ち方で、いろいろな立場の方がいろんな意見を持っている可能性がありますね。

滝沢先生 いろんな方がいらっしゃるんです。新聞によく出てきているのは、教育長レベルです。

福井主査 愛国心などの関心の方も多いのではないですか。

滝沢先生 そうだと思います。なにしろ、日本史は必修にすべきだ。でも、ある程度で今は止まっています。一昨日、熊本県からそういうものが出たというのは聞きましたけれども、一部のところで止まっています。

福井主査 学会などで何かアピールはないのですか。

滝沢先生 今、学術会議の方で、地理歴史科教育検討分科会みたいなものが立ち上がってあるんです。委員は世界史、日本史、地理から出て、あとは教育の方が出ていて成り立っているんです。

福井主査 日本史を必修にするとかですか。

滝沢先生 そこでは、そういうことは余りおっしゃっていないんです。

福井主査 わかりました。

滝沢先生 あと、1つ動きで、世界史の方が地理と歴史を一緒にした基礎科目をつくってはどうか。検討しようという意見が出ていますけれども、それは理屈はいいんです。確かに基礎科目だなと思います。だけれども、教える人がどうなのかというと、それは問題なんです。だから、中学校の選択性も同じなんです。言ってみれば、いいなとなるんだけれども、現実問題はどうなるんだろうといったときには、ちょっと無理だと思います。そこはやはり注意しないといけないなと思います。

福井主査 両先生は、いわゆる地理学会の幹部でいらっしゃるという理解でよろしいんですか。

戸所先生 そうです。

滝沢先生 そうです。ちょっと誤解がないように申しますが、地理学会では地理を必修にという陳情とか、そういうものは出していないです。ある時期、日本史必修化ということをすごく騒いだときには、それではということで、一時期、決議はしました。

福井主査 今後地理学会として、何らかのアピールなり提言を出されるということはあるんですか。

戸所先生 既に昨年9月に出しました。主文だけ申し上げますと、このたびの学習指導要領の改訂に際し、高等学校地理歴史科の科目履修において、地理が必修科目とされることを要望するということは出しております。

滝沢先生 最後の方にね。

戸所先生 ほかに地理学会にも幾つも種類がありまして、そのところからも地理教育というものを進めています。

福井主査 地理学会は幾つもあるけれども、全体的にそういうムードなんですか。

戸所先生 今、言いましたのは、日本地理学会で、これは一番大きな学会です。しかし、地理教育学会や人文地理学会とかさまざまなものがありまして、そういうところも出しております。文科省の方をお願いしている形になっています。

福井主査 ちょっと気になりますのは、日本史との関係です。

滝沢先生 日本史は冷遇されている気はないんです。

戸所先生 されていないと思います。

福井主査 されていると思っていないんですか。

滝沢先生 減っていませんね。

福井主査 でも、昔に比べれば随分減っていますね。

滝沢先生 あれは全部が必修の時代だからね。

戸所先生 教員数とかそういうところからいって、バランスがあります。やはりそういう点では、デンとしています。

福井主査 両方で言われる方が説得力がありますね。何か敗者のひがみみたいに思われると不利ですよね。失礼ながら、そう見る人はいると思います。

滝沢先生 なるほどね。

福井主査 同じく手を携え合った方がいいのではないかという気がします。

浅見専門委員 同じく言うと、先ほど余り教える能力のない教員もいるというようなことをおっしゃいましたけれども、そういう教育を受けてきた人たちは、あんな地理をやってもしようがないのではないかと思っているんだろうと思います。

滝沢先生 思っていると思います。

浅見専門委員 だから、地理教育自体を改革していくんだということを少し全面に出された方が、私はいいいのではないかと思います。

滝沢先生 今、地理教育の方では、いろんな検討はしています。

戸所先生 先ほど教員の問題を最初に申し上げましたが、そのところは、今、学会の内部でも、あるいは学術会議でもいろいろ話をして、その方向に向かうべく努力しているところです。ただし、学習指導要領など国としての枠組みが非常に弱体であると、幾ら努力しても、今、言われたようなことで悪循環になってくる。その悪循環が始まっているわけです。

そのことで一番懸念しますのは、ある歴史のある国のところだけでシフトしていくと、どうしても国際的に関係したときにおかしくなりかねないんです。ですから、あるべき日本の今後の姿というものを考えたときには、どういうふうに教育していくべきかということからも、単に力学的なことではなくてお願いしたいなということなんです。

滝沢先生 私はそれを言いたいんです。

戸所先生 だいぶ前になりますが、アメリカの地理教育が非常に弱くなり、外国への関心が薄れた中でイラン革命などが生じました。国民の地理的知識の必要性を認識したアメリカは、それ以降、地理教育に対してかなり積極的になってきているということがあります。その辺を考えていただきますと、日本という国は国民の地理的な認識が弱いですし、そういうところでお考えいただけたら幸いと思います。

滝沢先生 済みません。お配りしてあるパンフレットみたいなものは何かといいますと、日本海の呼称です。呼び方です。日本海の呼称について、韓国が東海とすべきということで、大々キャンペーンをしまして、大分進んでいます。浸透しています。英文のタイムズアトラスとか、イギリス、アメリカから出ている地図帳には、東海は併記されて出ています。

福井主査 その反論なんですか。

滝沢先生 現状はそうなんです。それを使用するオセアニア諸国とか、いろんなところへ普及し出しているんです。これは教育の面からもそうなりかねない。

韓国がこんなものをどんどん出しているんですが、日本としては、それに反論するような子どもっぽいことはしないで、あくまでも学術的に日本海の呼称というのはどう言うんだろうということ

をきちっと書いたものなんです。

福井主査 これは地理学会でつくられたんですか。

滝沢先生 外務省なんです、一応、地理の人が関わっています。

なぜ、今日お配りしたかという、領土や領域、領土問題でも、それについてきちっと教えらるるのは、やはり地理なんです。空間的に認識する。東海とかそういう問題も、地理では教えていないんです。教えらる先生がいないというか、教えていない。

福井主査 教科書にも書いてないんですか。

滝沢先生 ないです。東海についてはないです。

戸所先生 東海についてはありませんが、私の資料の1の「5）我が国の国土の位置と領土に関する知識の欠如」に、一応書いています。東海の問題については書いていませんけれども、しかし、その辺が触れられる教員かどうかとか、実は新聞記者の方といろいろお話をしまして感じたことは、地理的な認識が非常に弱いのために、そういったことを国民に知らせていくということが弱いんです。

ですから、2日前に東海について国際的な指示を出す協会に、韓国が押し込んでいるわけです。

滝沢先生 物すごいです。

戸所先生 ですから、それに対して、日本は非常に弱いといいますが、これはもっと多くの国民がそれを知っていれば、また変わってくると思いますが、政府なり地理学会だけでやっても、だめなのです。

福井主査 中学校の地理分野の学習指導要領に入れてしまえばいいのではないですか。そうしたら、全国民が必ず知ることができます。

滝沢先生 今、北方領土については、小学校4年生で必ず島の名前とそれについてを学ぶということが指導要領に入ったんです。それから、中学校、高校でもやるんです。ただ、尖閣諸島と竹島については、指導要領で書くべきというものは今ないんです。

福井主査 東海はどうなんですか。

滝沢先生 東海は全く論外です。

小田原委員 それはどうして無理なんですか。

滝沢先生 結局、竹島についても詳しく書かないようにというのは、書くと物すごい変な圧力が大変なものなんです。

戸田専門委員 雑談でよければ申し上げるけれども、公民ではすごくやっているんです。政治経済や現代社会では、領海、領域に関して、物すごい詳しくやっています。竹島問題もやっています。

滝沢先生 地理でもやっています。

戸田専門委員 おっしゃるのは、現場の一部の先生から苦情がくるんです。一部ですけれどもね。必ず投書が来ます。何でこれをそういうふうにするのかということです。55年体制のしっぽを残した一定の年齢以上の先生が、社会科には結構おられます。私どもの年齢では、かなりイデオロジカルですね。

白石委員 あと、都道府県に聞けば、今、社会に携わっている人たちの中で、地理を専攻してき

ていて、純然と地理を教えている人の割合はどれぐらいかということはわかるんですか。

滝沢先生 なかなか難しいですね。

小田原委員 東京都の高校は高いと思います。

福井主査 そうでしょうね。

滝沢先生 多分、減っているはずですが、2007年問題をまさに反映して、どんどん減ってくるから、減ると思います。

小田原委員 先ほどの年齢構成で言えば、地理に限らず、すべての教科がそういうふうに、数は多少ありますけれども、若い先生方の専門教科のあれはね。

滝沢先生 地理を教えられる先生がいなくなってしまう。

小田原委員 地理だけではなくて、物理もみんなそうだと思います。

滝沢先生 ただ、世界史は連綿としてきているから、教えられるんです。

福井主査 ちなみに、ちょっと畑違いだと思うんですが、理科のことは御存じですか。物理化学、生物、地学とありましたけれども、あれも何かだけ必修とかはあるんですか。

浅見専門委員 我々のところに配られた指導要領に書いてあります。

福井主査 世界史に当たるような特別扱いがあるんですか。

滝沢先生 ないんですが、地学が非常に落ち込んでしまっています。

福井主査 地学はなくなったんですか。

滝沢先生 そんなことを言うてはいけません。あるんです。あるんですが、履修者が少ない。

福井主査 今、地学は必修ではないわけですね。

小田原委員 選択の必修なんです。

滝沢先生 全部選択なんです。

福井主査 かつては、全部必修でした。

滝沢先生 だから、そういう方たちが政治家でも本当に上の方はみんなそうなんです。今の若い人もそれでできていると思っているから、当然みんなわかっているだろうと思っていることが問題なんです。

福井主査 逆に言えば、物理化学、生物は必修なんですか。

小田原委員 その中から2科目選択して、必修ということですか。

福井主査 今、理科も随分薄くなっているんですね。理科と比べても、世界史必修というのは、ややバランスが悪いんですね。確かに、世界史だけ突出していますね。

白石委員 だから、医学部や獣医学部に入ってくる子でも、生物を取っていない子がいるみたいです。

戸所先生 少なくとも、我々のときにはみんな必修だったわけです。一定の必修でもっていけば、仮にそれが好きか嫌いかは別問題として、今でも生物なら生物、物理化学もある程度わかるわけです。そのことは重要だと思います。

福井主査 偏るでしょうね。

戸所先生 ですから、そのところを規制緩和してしまうと、やはり問題があるのではないかと

思います。

小田原委員 この間の世界史の未履修の関連で、理科総合を必修に入れなければいけなかったんだけど、都立のほとんどの学校は理科総合を入れていないわけです。化学Ⅰでやっていて、それも引っかけってしまったんだけど、東京都の教育委員会は化学Ⅰ、物理Ⅰで理科総合の範囲を含むから構わないと見解を出したんです。

福井主査 理科総合というのは、別にある建前で必修だということになっているわけですか。

小田原委員 それを入れないといけない。

福井主査 面白いですね。

小田原委員 だから、その傾向というか流れは、先ほどの社会科の地理などを薄く必修にしたら、やはり学校現場は避けるのではないかと思います。

福井主査 ありがとうございます。大変貴重なお話を伺いました。どうもお疲れ様でございました。